

故 木村達明会員の逝去を悼む

東京地学協会会員・元理事・財団法人自然史科学研究所理事長・元東京学芸大学教授木村達明先生は、平成 13 年 5 月 30 日自宅で転倒し脳挫傷を起こし入院加療を受けたが、6 月 18 日正午過ぎ永眠した。ご令室やお子様達に看取られての安らかな旅立ちであったと伺っている。享年 75 歳、まさに痛恨のきわみで衷心より御冥福をお祈りする。

先生は大正 14 年 11 月 27 日生を受け昭和の激動期に成人し、太平洋戦争の最中に東京高等師範学校併設の第一臨時教員養成所に入学した。学半ばにして短期応召したが、終戦とともに学舎に復して昭和 22 年卒業、ただちに旧制群馬県立沼田中学校の教諭として教育者の第一歩を踏み出した。その後学問研鑽への願望を断ちがたく、東京文理科大学理学部地質学鉱物学学科に入学、藤本治義・柴田秀賢両教授らの薫陶を受けた。卒業研究は群馬県片品川上流地域で、時代未詳の地層から中生代植物化石を発見し岩室層と命名した。この地層は来馬層群の北関東への延長で当時学会で注目されたばかりでなく、故人の生涯の研究テーマの中生代古植物学研究の契機となった。卒業後ただちに東京教育大学附属高等学校教諭となり、多忙な校務のかたわら岩室層を始め、手取層群・来馬層群など各地の中生代植物化石を採集し、早世した大石三郎博士の後継者たるべく植物化石の研究を手広く開始した。昭和 35 年には学校法人目白学園に転じ、女子短期大学の新設に尽力し、学長事務取扱ならびに教授として創設期の錯綜する校務をこなした。また同学園の高等学校・中学校の校長として、14 年間に亘り同僚・生徒・学生の敬愛を一身に受け女子教育に貢献した。この間も先生は植物化石の研究を続け、夏期休暇中には手取川上流域を踏査し、地元有志の協力もあって稀に見る保存良好な標本を集めた。さらにイギリスの古植物学の世界的泰斗 Harris 博士の門戸を度々叩き、化石植物の組織学的研究など直接教えを受けた。昭和 49 年には東京学芸大学教育学部の助教授に迎えられ 48 歳にして初めて教育と研究に専念する機会を得た。昭和 51 年には教授に昇進し、以来定



年退職する昭和 63 年まで、学問研究の醍醐味を多くの学生に植え付けると共に、理科教育・地学教育に携わる優秀な人材を薫育して教育界に送った。この間東京学芸大学附属中学校校長も兼務した。

昭和 63 年定年退官後はただちに財団法人自然史科学研究所を創設し、13 年間に亘り一途な研究生活を続けた。故人はこれまで 200 編に近い研究論文を公表すると共に、教科書、参考書、普及書なども数多く手がけた。先生の研究で多くの新種・新属を含む記載論文は無論であるが、早くから提唱した日本と広範な東アジア全域の中生代古植物地理区の設定は特に慧眼であったと言えよう。この古植物地理区はアジア大陸の構造発達史解明に内外の研究者によって、今日でも有力な傍証としてしばしば引用されている。

さらに特筆すべきは先生の関係学会への顕著な貢献である。昭 51 年から 57 年まで東京地学協合理事を勤め、財政面の刷新を計り、本会の今日の発展に著しく貢献した。日本古生物学会では長く評議員・常務委員として会の近代化を推進し、昭和 62 年・63 年には会長を勤めた。その他にも古生物研究連絡委員会委員、学術審議会委員、日本地学教育学会などの各種委員を真摯に務めた。

木村先生は平素服装は極めて洒落で、規律と礼節を重んじ、幅広い才能に恵まれた稀に見る逸材であり、こよなくお酒を嗜んだ酒仙でもあった。6 月 30 日正午過ぎ文京区護国寺での盛大な告別式には、参列者が故人の遺徳をしのびつつ長列をつくって焼香した。故人も草場の陰でさぞかし喜んで居られた事と拝察する。 猪郷久義